

テレビの「語り」に関する一考察
ーインタビュー番組における司会者とゲストの
コミュニケーション分析から
A Study of “Narratives” on TV
-Through an Analysis of Communication
between Hosts and Guests in Two Interview Shows

鹿島 千穂
Chiho KASHIMA

和洋女子大学人文学部非常勤講師 Wayo Women's University

要旨…本研究の目的は、映像中心のテレビにおいて、言語による表現はどのように実践され、いかに重要であるのか、その意義を明らかにすることである。テレビの中でも「語り」の要素が色濃く反映されるインタビュー番組を分析の対象とし、司会者とゲストのコミュニケーションに注目して会話分析を行った。その結果、司会者はさまざまなテクニックを駆使し、自身のパーソナリティを表出させながら「語り」に挑み、ゲストはそれに呼応する形で「語り」を提示していることが明らかになった。また、インタビュー番組における「語り」は、親密性と演技性のバランスを変化させながら成立していることもわかり、テレビにおける「語り」の複雑性と多様性が浮き彫りになった。

キーワード 語り, インタビュー, コミュニケーション, 親密性, 演技性

1. はじめに

本研究は、テレビにおける「語り」を通して、テレビ文化の一面を考察するものである。テレビは映像と音声¹の両方から成り立つメディアである。テレビのなかでは、アナウンサーが伝えるニュース、ドキュメンタリー番組のナレーション、ドラマにおける俳優の台詞、バラエティ番組や情報番組でのトークのように、出演者が音声による表現を行っている。本研究では、このような言語を伴う音声表現を「語り」として研究を進めていく。

これまで人々のテレビへの関心は、「語り」よりも専ら映像に向けられてきた感がある。また、テレビ文化に関する従来の研究も主に映像中心であり、どのような分野からのアプローチであれ、「語り」そのものに注意が向けられることは少なかった。本研究の目的は、テレビにおける言語的側面に注目して「語り」の重要性を示すとともに、テレビの「語り」研究という新たな領域を確立する可能性を探ることである。

2. 分析の対象

前述のように、本研究では言語を伴う音声表現を「語り」と定義し、テレビの「語り」について考察を進めていくが、その際トーク番組を分析対象とする。なぜなら、出演者の会話がメインであるトーク番組は、ニュース番組、ドラマ、ドキュメンタリー番組、スポーツ番組といった他の番組形態に比べて、「語り」のさまざまな性質が色濃く反映されるはずだからである。さらに、トーク番組のなかでも、とりわけインタビュー形式のものをみてみると、司会者とゲストの「語り」を中心に番組全体が構成されており、「語り」の真骨頂と言えるものが多い。このような理由から、本研究ではインタビュー形式のトーク番組を通して、テレビにおける「語り」について考察する。なお、特に言及しない限り、本研究におけるインタビュー番組とはインタビュー形式のトーク番組のことを指す。

¹大辞林によれば、「音声」とは①人間が意思を伝達するために口から発する音②人の声③おと、である。また、一般にテレビの「音声」といえば、人の声、音楽、音響、ノイズ（雑音）などを指す。このように「音声」という言葉は複数の意味を持つため、人の声に限った音声を他のものと区別して定義する必要がある。

3. 分析の概要

インタビュー番組における司会者とゲストの役割は明確に異なる。そこで、まずはニュース番組やトーク番組に関する先行研究を緻密に分析し、インタビュー番組は、司会者による「語らせ方」とゲストによる「語られたもの」の二つの側面で構成されることを導き出した。

これを基に、インタビュー番組は司会者によるさまざまな「語らせ方」とゲストによる「語られたもの」が相互に作用して成り立っている、という仮説を立て二つのインタビュー番組を分析する。対象番組は、『徹子の部屋』²（テレビ朝日系）と『サワコの朝』³（TBS/MBS系）である。

分析は事前分析と実証分析の二段階で行う。事前分析では、両番組に出演した同一ゲスト3人の回を比較分析し、司会者の「語らせ方」とゲストからの「語られたもの」に内包される基準要素を抽出する。次に、事前分析で抽出した基準要素を用いて、10人のゲストの出演回における様々なエピソードの実証分析を行う。その際、親密性と演技性という概念を重視し、この二つの概念を軸に、「語らせ方」と「語られたもの」の基準要素が相互に作用しながら「語り」が成立している様子を見る。

4. テレビにおける「親密性」と「演技性」

親密性とは、近代社会における親しい人間関係の基盤となるものであり、家族、友だち、恋愛などの私的な関係に用いられる概念である（ギデンズ 1995）。後にトムリンソンは、人々のメディア接触の変化に伴って親密性は再定義される必要があるとし、メディアを通じた新たな形の親密性を「公的な親密性」と表現した（トムリンソン 2000）。さらに深澤は、ニュース番組は視聴者との間に親密性の構築を目指しているとし、ここでの公的な親密性とは、視聴者を送り手側の世界に招き入れる戦略である、と指摘している（深澤 2015）。

ニュース番組以上に視聴者が出演者に親密な感情を抱きやすいトーク番組では、番組と視聴者の間に親密性が築かれているはずである。そこで本研究は、司会者の「語らせ方」とゲストからの「語られたもの」のなかにあらわれる親密性構築の方法に注目し、分析を進める。

インタビュー番組の「語り」におけるもうひとつの重要な概念は、演技性である。ゴフマンによれば、私たちはさまざまな社会的舞台でそれぞれの役割を演じ、オーディエンスに対して、異なるバージョンの自己を提示している（ゴフマン 1974）。これをテレビのインタビュー番組に援用すると、出演者はテレビ番組という社会的舞台で与えられた役割を演じ、オーディエンスすなわち不特定多数の視聴者からの期待に応えようと、意識して振る舞っているということになる。つまりテレビ番組の出演者は、自らが求められる役割を演じたり、自己イメージを表出したりするために、あるいは視聴者との間に親密性を構築するために、演技性を伴うパフォーマンスを行っているのである。そこで本研究は、司会者の「語らせ方」とゲストからの「語られたもの」における演技性のあらわれ方にも注目し、分析を試みる。

5. 基準要素の抽出

分析の対象として取り上げたのは、『徹子の部屋』（テレビ朝日系）と『サワコの朝』（TBS/MBS系）である。司会者の「語らせ方」とゲストによる「語られたもの」に内包される基準要素を抽出するために、2015年春から2016年秋にかけて放送された両番組のデータを使用した。この期間に、それほど間隔を空けずに同じゲストが出演した回のなかから、性別、職業、番組への出演回数などのバランスを考え、下記の表1に示した3人の出演回を取り上げた。

表1『徹子の部屋』と『サワコの朝』同一ゲストの出演回

ゲスト名	『徹子の部屋』放送日	『サワコの朝』放送日	共通の話題
ピーター	2015年6月22日	2015年9月19日	断捨離、両親との思い出
中野信子	2016年4月4日	2016年1月23日	脳科学、青春時代
桃井かおり	2016年8月19日	2016年3月12日	結婚、ロスでの生活

²1976年2月放送開始。司会は黒柳徹子。放送時間帯を変えながら、現在は月曜から金曜昼12時～12時30分放送。2011年には同一司会者による番組の最多放送回数記録でギネス世界記録に認定され、2015年5月には放送回数が1万回を超える長寿番組となった。

³2011年10月放送開始。司会は阿川佐和子。土曜朝7時20分～8時放送。大阪MBSと東京TBSの共同制作。「見せて、聴かせる」新感覚トーク番組をコンセプトに、ゲストの思い入れのある音楽を交えた構成でインタビューが展開される。

3人が出演した回のインタビューを録画し、会話をトランスクリプトとして書き起こした。トランスクリプトを確認しながら繰り返し視聴してみると、出演時期が近いため話題は共通しているが、強調する内容、それに伴い披露されるエピソード、語り方などが微妙に異なることがみえてきた。また、司会者の黒柳と阿川では、ゲストからの話の引き出し方や受け止め方にも違いがあった。このように司会者とゲストのやりとりを観察し、「語らせ方」と「語られたもの」に関係する要素をそれぞれ4つずつ抽出して表2のように分類した。

表2 「語らせ方」と「語られたもの」の基準要素

語らせ方	語られたもの
質問スタイル	語り方
あいづちの効果	ゲストの職業
司会者のパーソナリティ	視聴者の興味関心
語らせる装置	ゲストの人生観と社会への提言

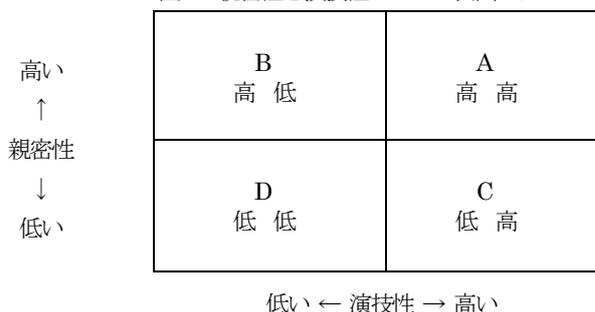
表2の「語らせ方」のうち、「質問スタイル」「あいづちの効果」「司会者のパーソナリティ」は司会者に直接関係するものである。「語らせる装置」とは、インタビュー中に画面に映し出される写真、VTR、音楽を指す。これらは、司会者の言語活動や属性に関するものではないが、ゲストは写真、VTR、音楽に誘われて過去を振り返り、思い出を語る。そのため、これらの素材にはゲストの話を引き出す作用があると考えられることから、「語らせ方」の重要な要素として項目に含めることとする。

一方、「語られたもの」うち、「ゲストの職業」「視聴者への興味関心」「ゲストの人生観と社会への提言」は内容に関係するものであるが、「語り方」は、ゲストがエピソードを披露する際の言語表現のことである。どのように語られたのかという「語り方」により、「語られたもの」の意味や価値が変化する可能性があることから、内容と同じく重要な要素とみなした。

6. 実証分析

事前分析で抽出した基準要素を用いて、「語らせ方」と「語られたもの」が相互に関わり合いながら、「語り」が成立する様相をみていく。その際、「語り」のなかに出る親密性と演技性のバランスに注目する。テレビのインタビュー番組の「語り」のなかには親密性と演技性が混在しているが、インタビューが予定調和ではないこと、さらに二重コミュニケーションが同時に行われるという構造的な特徴から、演技性と親密性のバランスは常に一定というわけではない。つまり、テレビのインタビュー番組では、親密性と演技性が微妙なバランスであらわれ、「語り」に影響を与えていると考えられる。そこで親密性と演技性の表出の仕方を、下記の図1に示す4つのパターンに分けて分析する。

図1 親密性と演技性の4つの表出パターン



4 「語り方」にはさまざまな手法があるが、ここでは「再演」と「評価」に注目した。「再演」は、過去の経験や出来事を話す際に、登場人物の口調を模倣するなどして演じる手法である。「評価」は話し手がストーリーを語り終えたあとに発する感情や態度のことで、話し手の体験がどのような意味を持っていたかを聞き手に伝える機能がある。どちらもインタビューという場における現在のトークのフレームのなかに、過去の経験のエピソードという別のフレームが埋め込まれているという層化状態において、劇中劇を効果的に見せるための手法である。

A「親密性と演技性の両方が高いパターン」、B「親密性が高く、演技性が低いパターン」C「親密性が低く、演技性が高いパターン」D「親密性も演技性も低いパターン」の4象限である。それぞれのパターンで、どのようなタイプの会話が展開されるのかを示す。

(1) 意図した親密性と演技性—究極のプライベートの告白

A「親密性と演技性の両方が高いパターン」では、ゲストが意図して究極のプライベートを披露する場面が考えられる。究極のプライベートとは、例えば表舞台の活躍のみを見ていたのでは知りえないどん底生活や闘病告白などが挙げられる。分析対象番組のゲストは芸能人が多い。普段は芸能活動をする著名人が、視聴者の興味関心を反映して、仕事にまつわる話とそれに伴うプライベート、人生観、社会への提言などを語る。ゲストがどこまで話せるかは、親密性をどこまで高めることができるのか、ということである。その意味で、ゲストが過去の憂き目や、自身あるいは家族の闘病生活という究極のプライベートを語るとき、親密性は非常に高い状態にあると言えるだろう。

このパターンの「語り」は、『徹子の部屋』で比較的好くみられる。そこで、黒柳の「語らせ方」が関係しているのではないかと分析を進めていくと、「司会者のパーソナリティ」「質問スタイル」「あいづちの効果」が関係していることが浮かび上がってきた。

(2) 意図しない親密性と演技性—ゲストの意外な一面

Bの「親密性が高く、演技性が低いパターン」の代表的なものとして、ゲストの意外な側面や思いがけないエピソードが露わになる場面が考えられる。Aのパターンと同じように、表舞台の活躍のみを見ていたのでは知り得ない部分ではあるが、Bのパターンの場合は、意図せず語られる点で演技性は低い。

例えば、『サワコの朝』の阿川とゲストのやりとりのなかでハプニング的に飛び出す「語り」などは、他では語られることのなかったエピソードや意外な人物像が露呈する典型である。ここでも、「司会者のパーソナリティ」「質問スタイル」「あいづちの効果」が強く関係していると同時に、ゲストは「語り方」のテクニックを駆使しながらエピソードを披露していることがみえてきた。また、「語らせ方」と「語られたもの」の基準要素が最も多く出現していたのが、このパターンである。

(3) 演技性に隠された親密性—説明責任

Cの「親密性が低く、演技性が高いパターン」は、親密性構築が目的ではなく、ゲストが自己イメージを創出あるいは保持するために演技性が高まる場面が想定される。この場合、何らかの理由で親密性の表出が難しいことが考えられる。例えば、不祥事やスキャンダルについての説明責任が発生し、ゲストが視聴者に向けて語ることを余儀なくされているケースなどである。

このパターンの場合、司会者は「視聴者の興味関心」を反映して質問をするが、ゲストは事前に質問の回答を用意してインタビューに臨んでいる可能性が高い。そのため、演技性が高く説明的なゲストの「語り」が続き、親密性構築を目的としたやりとりはあまりみられない傾向がある。

(4) 親密性と演技性の放棄—宣伝目的の「語り」

Dの「親密性も演技性も低いパターン」は、親密性を構築する必要も演技性を高める必要もない場面であるため、義務としての「語り」が考えられる。例えば、ゲストが出演する予定の映画、ドラマ、舞台、コンサートなどの宣伝や告知などが挙げられる。こういった宣伝用のトークは、必須事項として始めからインタビューに組み込まれていることが多い。

このような「語り」は、「視聴者の興味関心」を反映したものではなく、「ゲストの人生観や社会への提言」でもないため親密性は低い。また、ゲストの自己イメージ表出や、親密性構築と関係する「語り」でもないため演技性も低いと言える。このパターンでは、「語らせ方」と「語られたもの」に内包される基準要素の出現が、他の3つのパターンに比べて少なかった。

7. 分析結果

第6章で示した親密性と演技性のバランスが異なる4種類の「語り」に分類されるインタビューの場面を切り取り、会話を書き起こしてトランスクリプトを作成し、分析を行った。その結果、司会者の「語らせ方」とゲストからの「語られたもの」に関係する8つの基準要素がどのように「語り」にあらわれていたのかをまとめると、図2のようになった。

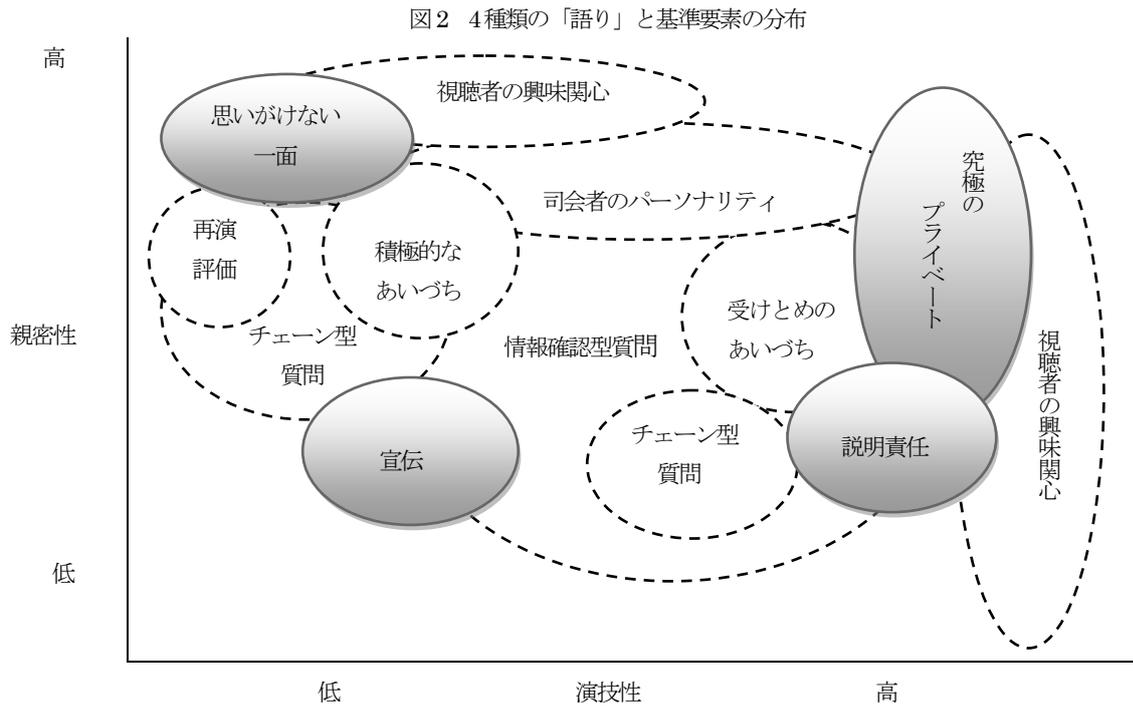


図2のなかにある「究極のプライベート」「思いがけない一面」「説明責任」「宣伝」は、親密性と演技性のバランスが異なる4つの「語り」の種類である。それぞれの「語り」は、さまざまな基準要素が関係して成り立っていることがうかがえる。そして、親密性と演技性が高いほど「語らせ方」と「語られたもの」の基準要素が多く出現し、それらが相互に作用し合っ「語り」が成立していることもみてとれる。

また、親密性と演技性のバランスが異なる4種類の「語り」は、インタビューの全体のなかから切り取った一場面であるため、「親密性と演技性が高い」や「親密性も演技性も低い」といったひとつの「語り」のパターンが、インタビュー全体を通して続くわけではない。例えば、「親密性が高く、演技性が低いパターン」は司会者とゲストの間にラポールが築かれた番組の後半に出現することが多いであろうし、「親密性も演技性も高いパターン」は、ゲストが意を決して語る究極のプライベートであるため、番組の冒頭に出現するとは考えにくい。つまり、一人の人物に対するインタビューであっても、時間の経過とともに親密性と演技性のバランスは刻一刻と変化しながら「語り」が成立しているのである。

8. まとめと課題

分析の結果、インタビュー番組の司会者は、質問スタイルやあいづちなどのテクニックを駆使し、自身のパーソナリティを表出させながら「語り」に挑んでいることが明らかになった。また、ゲストは司会者の「語らせ方」に呼応する形で、ときに再演や評価といった「語り方」のテクニックを使いながら、「語り」を提示していることもわかった。そして、親密性と演技性のバランスが変わることに伴い、司会者の「語らせ方」とゲストからの「語られたもの」に含まれる要素のあらわれ方も変化することが明らかになった。

このことは、インタビュー番組において、司会者の「語らせ方」とゲストによる「語られたもの」が相互に作用しながら成立していることを意味し、インタビュー番組における「語り」が複雑かつ多様であることを示している。これまで映像が重視されてきたテレビであるが、「語り」すなわち音声表現も重要なものであり、今後はテレビにおける「語り」の研究も進める必要があるのではないだろうか。

しかしながら、本研究は『徹子の部屋』と『サワコの朝』という特定のインタビュー番組を取り上げ、テレビの「語り」について考察したものであり、この結果をテレビの「語り」全体の性質として即座に一般化できるわけではない。検証のためには複数のジャンルの番組を分析し、多角的なアプローチをすることが必要であり、今後の課題である。

参考文献

- 伊藤守(2006)「ニュースのディスコース分析、マルチモダリティ分析」伊藤守編『テレビニュースの社会学—マルチモダリティ分析の実践』世界思想社
- 岡井崇之(2003)「パフォーマンスとしてのテレビ人生相談—『おもいっきり生電話』の言説分析から」『コミュニケーション研究』33号 上智大学紀要
- デボラ・カメロン(2012), 林宅男訳『話し言葉の談話分析』ひつじ書房Cameron, Deborah, 2001, *Working with Spoken Discourse*, Sage Publications.
- アンソニー・ギデンズ(1996) 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房, Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press.
- 金水敏編(2007)『役者語研究の地平』くろしお出版
- 上滝徹也(2007)「『バラエティー』という名の方法論—テレビの特性と番組の変遷」『月間民放』2007年6月号
- 小玉安恵(2012)「トーク番組の体験談において表出される芸能人の自己イメージとその語り方—フレームとスキーマからの分析」『ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか』
- アーヴィング・ゴフマン(1974) 石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書, Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor.
- 阪本俊生(1991)「トークと社会関係」安川一編『ゴフマン世界の再構成—共在の技法と秩序』世界思想社 101—128.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚(2012)『ライフストーリー論』弘文社.
- 桜井厚・小林多寿子編(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房.
- 桜井哲夫(1994)『TV 魔法のメディア』ちくま新書.
- 佐々木健一(1982)『せりふの構造』筑摩書房.
- 鈴木聡志(2007)『会話分析・ディスコース分析—ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社.
- ジョン・トムリンソン(2000)片岡信訳『グローバリゼーション』青土社, Tomlinson, John, 1999, *Globalization and Culture*, Polity Press.
- 西倉実季(2015)「なぜ『語り方』を記述するのか—読者層とライフストーリー研究を発表する意義に注目して」『ライフストーリー研究に何ができるか—対話的構築主義の批判的継承』新曜社.
- 丹羽美之(2007)「情報番組を再考する」『月間民放』2007年6月号.
- 萩原滋編(2001)『変容するメディアとニュース報道』丸善.
- 深澤弘樹(2015)『変容するテレビニュースとキャスターの役割』春風社.
- 藤竹暁編(2012)『図説 日本のメディア』NHKブックス.
- 藤竹暁(2003)「環境となったテレビ」『思想』956号
- 藤田真文(2006)「テレビニュースの談話分析—キャスターから視聴者への語りかけの分析」伊藤守編『テレビニュースの社会学』世界思想社
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号.
- 南保輔(2008)「徹子が黙ったとき—テレビトーク番組の相互作用分析」『コミュニケーション紀要』20号 成城大学.
- 南保輔(2015)「引用発話・再演・リハーサル」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとり秩序の社会学』新曜社.
- 泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版.
- 泉子・K・メイナード(1992)『会話分析』くろしお出版.
- ジョシュア・メイロウィッツ(2003) 安川一・高山啓子・上谷香陽訳『場所感の喪失—電子メディアが社会的行動に及ぼす影響 上』新曜社, Meyrowitz, Joshua, 1985, *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford University Press.
- 横山滋(2001)「ニュースメディアとしてのテレビ特性」萩原滋編『変容するメディアとニュース報道』丸善.
- 鷲田清一(2015)『「聴く」ことのか—臨床哲学試論』ちくま学芸文庫